

## 概 要

### 【研究背景】

近年,急性期治療の短縮化に伴い,回復期リハビリテーション病棟(以下,回リハ病棟)において重症患者の割合は増加している.特に脳卒中患者は新たなADL獲得が必要で,回リハ病棟での転倒リスクが高いといえる.当院では2012年から転倒・転落対策チームを発足し活動している.しかし,インシデント報告はなくなり,事故を繰り返すケースも多く発生しているのが現状で,脳卒中患者の特徴を把握し,事故防止の対策が必要であった.

### 【研究目的】

脳卒中患者で複数回,転倒・転落のあった患者の特徴を明らかにする.転倒・転落の定義は,「自らの意思からではなく,地面またはより低い場所に足底以外の身体の一部が接触すること」とした.

### 【研究方法】

対象:2013年4月から10月に回リハ病棟に入院した脳卒中患者99名.退院時の機能的自立度評価表(以下,FIM)の移乗ベッド,移乗トイレ,移動の3項目全てが1点の寝たきりレベルの患者は対象から除外した.

方法:独立変数を非転倒群,1回転倒群,複数転倒群とし,従属変数を在院日数,Brunnstrom recovery stage,感覚障害,失語,注意障害,半側空間無視,Mini-Mental State Examination,FIMとした.

検定方法:3群間の比較にKruskal-Wallis検定,多重比較にsheffe法を使用した.有意水準は5%とした.本研究は後方視的研究であり,データは個人が特定できないよう配慮した.

### 【結果】

非転倒群は66名で平均年齢は74.3±10.7歳,1回転倒群は21名で平均年齢は70.8±13.7歳,複数転倒群は12名で平均年齢は72.3±11.3歳であった.転倒率は33%であった.3群間の比較の結果,非転倒群と1回転倒群に有意差はみられなかった.複数転倒群の在院日数は非転倒群,1回転倒群に比べ有意に長かった.複数転倒群のFIM項目のうち表出,整容,更衣(下)移乗ベ

ッドの得点は非転倒群に比べ有意に低かった.複数転倒群の入院時FIM総得点は非転倒群に比べ有意に低かった.複数転倒群のFIM利得は非転倒群に比べ優位に高かった.FIM効率は複数転倒群が0.21と最も高かった.

### 【考察】

複数転倒群の在院日数が長い理由として入院時FIMが全国平均よりも低い56.3点で重症患者が多いことが一因と考えた.入院時から排泄,睡眠等の基本的な欲求をうまく伝えられず,セルフケア・移乗動作に中等度介助が必要な患者に対して,入院時から座位保持能力が安定するまでの間は転倒・転落事故防止の対策を個別性に応じて実行する必要がある.今回の結果では転倒と認知機能低下に関連はみられなかった.先行研究では回リハ病棟での転倒との認知機能低下との関連が報告されているが,当院では認知機能低下により単独で立ち上がる,移動する等の危険行動を起こす患者の情報共有を徹底,患者の目配りを行っていたことが一因と考えた.

### 【今後の展望】

表出が困難な患者に対しては,スタッフ間でコミュニケーションの取り方を統一して基本的欲求を把握し単独行動に至る動機を捉えること.セルフケア移乗に中等度介助を要する患者に対しては,日々の「している動作」の変化に,より一層注意をはらい,危険がないか評価し,早めに対策を立てることの2点を各職種が包括的に介入することで転倒・転落の予防・防止に繋がると考える.

### 【引用参考文献】

- ・二井俊行,飯田有輝,他:回復期リハビリテーション病棟における脳卒中片麻痺患者の転倒要因.2006
- ・鈴木亨,園田茂,他:回復期リハビリテーション目的の入院脳卒中患者における転倒,転落事故とADL.2006
- ・全国平均データ出典:回復期リハビリテーション病棟の現状と課題に関する調査報告書